NO : 270
2020/ 10

パーキスターン

イムラーン・ハーン政権の観光戦略と旅ブロガー
須永恵美子

パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力（1）　松田和憲

公益財団法人　日本・パキスタン協会

پاکستان

◆ 目 次 ◆

イムラーン・ハーン政権の観光戦略と旅ブロガー …… 須永恵美子 (1)

パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力（1） …… 松田和憲 (9)

2019-20 年度パキスタンの自動車販売実績が発表されました …… (15)

協会ホームページに英文ページを新設しました …… (16)

人と食、それは愛。そしてパキスタン（その 43）…… シャー真理子 (20)

パキスタン・ニュース…… (21)

パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力（1）

松田和憲

1．はじめに
2．イスラーム宗教勢力の分類
3．今後の連載について

1．はじめに

パキスタンは「ムスリム国家」であるか、それとも「イスラーム国家」であるか。この議論は独立当初から問題にされてきた。本シリーズでは「イスラーム国家」を志向するイスラーム勢力と宗教政党に焦点を当て、その展開を大まかに概観する。

そもそもパキスタンにおけるイスラーム勢力は一枚岩のように見られがちである。しかしながらスンナ派とシーア派の対立に加え、実はスンナ派内部にも対立が存在する。イスラーム宗教政党はイスラーム学者が大衆を指導しているという形はそれぞれ共通しているものの、その内実や主張については大きく異なることがしばしばである。また 9･11 以降、軍部とのつながりやアフガニスタン情勢と絡めた安全保障的な観点からパキスタンのイスラームを分析する傾向が非常に強い［中野 2014; 山根 2000; Haqqani 2005］。イスラーム勢力と過激な武装組織とのつながりは日本のみならず国際社会の大きな関心を引き寄せ、イスラームとテロリズムを安易に結びつける偏った見方が広く蔓延している。

パキスタンにおけるイスラーム宗教勢力は過激な武装勢力とのつながりが強調される一方で、国内政治におけるアクターとしての側面や国内・国外において一定の影響力を有している。特に 2000 年代以降、パキスタン政治における彼らの存在感が増してきている。2002 年にムシャッラフ軍事政権下で行われたパキスタン下院選挙にて、イスラーム宗教政党連合である統一行動評議会（Muttahida Majlis-e-Amal）が国政第 3 党として躍進

統一行動評議会（MMA）の FACEBOOK ページのカバー写真
https://www.facebook.com/MuttahidaMajlisAmal/ （2020 年 9 月 29 日閲覧）

した。9･11 以降の「アメリカの対テロ戦争に協力するムシャラフ大統領に対する反感」[深町 小田 牧野 2003: 567-568] ゆえに、反米を推進していた彼らへの支持が集まった。この出来事はイスラーム宗教政党がパキスタンの国政に対して直接的に影響力を有し始めた最初の事例であるとともに、21 世紀における宗教政党の国政躍進ということで大きな注目を集めた。

近年では冒涜法廃止に反対する過激な一勢力としてラッバイク(1)運動が有名である。冒涜法により訴えられたキリスト教徒のアーシア・ノーリーンの無罪判決が 2019 年 10 月 31 日に最高裁判所で出された時も、ラッバイク運動の支持者たちによる大規模な抗議デモが行われた [井上 牧野 2019: 571]。

近年の活発な政治活動に加え、先行研究においてもパキスタンのイスラーム宗教政党は非常にホットなテーマである [Akbar 2020]。パキスタンにおけるイスラームの動向について詳しく論じた [Zaman 2018] や、パキスタン独立以降のデーオバンド派の動向をまとめた [Ingram 2018] など、パキスタンのイスラームに着目した優れた研究は研究者の間で大きな注目を集めている。

このように、パキスタンにおけるイスラーム勢力や宗教政党を理解することは、政治や安全保障のみならず南アジアのイスラームを考えるうえで非常に有益である。日本では加賀谷寛先生による「政治エリートとしての宗教勢力」という先駆的かつ詳細な論考 [加賀谷 1992] がある(2)。次節ではイスラーム宗教勢力について少し詳しくみていく。

2．イスラーム宗教勢力の分類

パキスタンにおけるイスラーム宗教政党は、ウラマー系宗教政党と非ウラマー系宗教政党にわけられる。端的にその違いを言うならば、前者はマドラサ（イスラーム学院）でイスラーム諸学を治めた学者たち（ウラマー）によって主導権が握られているのに対し、後者は大学をはじめとする西洋近代教育課程を治めた知識人も政党運営に大きく参画している。後者の代表例はイスラーム党 (Jamaat-e-Islami) である。同党は西洋近代教育を受けながらも、パキスタンをイスラーム国家にすることを目指す人々の受け皿となっている。同党は 1977 年に登場したズィアーウル・ハク政権のイスラーム化政策に少なからず影響を与えた。

前者のウラマー系宗教政党に関して　はスンナ派とシーア派、そしてスンナ派の中で派閥が分かれている。具体的には 1. デーオバンド派、2. バレールヴィー派、3. アフレ・ハディース派といった系統に大別することができる。パキスタンのスンナ派の 9 割以上はハナフィー法学派に属している。その下に南アジアで形成された 3 つの派閥（デーオ

（1）アラビア語で「私はあなた（神）の呼びかけに応答する」の意。

（2）このほかに日本語で読めるイスラーム宗教政党の動向として、萬宮健策先生による 1990 年代から 2010 年代までのパキスタンの政党に関する解説の中で、イスラーム宗教政党連合である統一行動評議会とイスラーム党が取り上げられている [萬宮 2010: 111-113]。

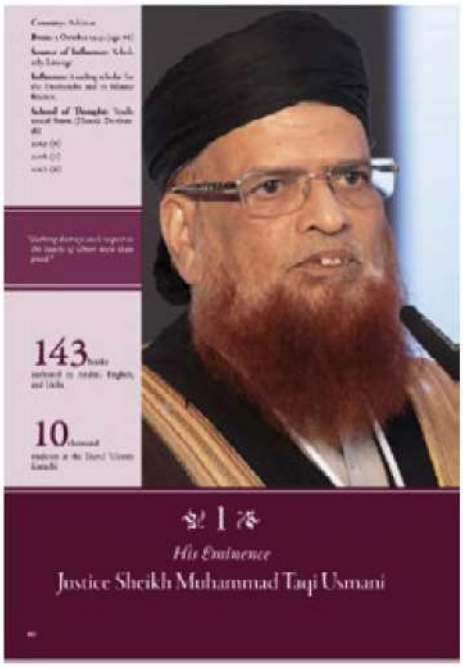
バンド派、バレールヴィー派、アフレ・ハディース派）があり、パキスタンのムスリムの多くはいずれかの派閥に属している。それぞれの派閥の特徴を一言で言い表すとするならば、デーオバンド派は中道、バレールヴィー派はスーフィズム、アフレ・ハディース派はサラフィー主義[3]となるだろう。

バレールヴィー派はスーフィズムとの親和性が強く、その指導者層にはイスラーム学者だけでなくスーフィーもいる[4]。日本においてスーフィズムはイスラーム神秘主義として知られているため、スーフィーはイスラーム神秘主義者という認識が一般的である。ただし現在の政治舞台に登場するのは、旋回舞踊や陶酔に浸り神との合一を目指すスーフィーよりも、預言者ムハンマドを完全な人間であるという理想像のもと修養を積み人々を指導する倫理的な要素を重視するスーフィーのほうが多い[5]。

アフレ・ハディース派は現代社会においてクルアーンやハディースの教えをより厳密に適用することを目指している。また現代の指導者の教えを盲目的に従うことを否定し、自ら預言者ムハンマドや教友たちの教えが書かれた原典を学ぶべきとの立場をとる。そのため原典よりも精神的修養を重視するスーフィズムに対して否定的になることが多い。またサウジアラビアのワッハーブ主義と親和性がある。

デーオバンド派は上記２派の中道を目指す立場である。同派はよくスーフィズムに批判的と言われることが多いが、実際はスーフィー聖者廟（聖者の墓）における異端的な慣習（ウルスと呼ばれる聖者祭を開催すること等）に対して批判しており、スーフィズムそのものは否定していない。パキスタンのエリート層の間ではこれら３派の中でデーオバンド派の影響が強いといわれている。

パキスタンのイスラーム学者で筆頭に上がるのは、デーオバンド派のムハンマド・タキー・ウスマーニー(Muhammad Taqi Usmani, 1943-)である。彼はカラチのデーオバンド系マドラサ（イスラーム学院）で



ムハンマド・タキー・ウスマーニー師
(*The Muslim 500: The World's 500 Most Influential Muslims, 2020.* The Royal Islamic Strategic Studies Centre, 2019, p.40 .)

（３）サラフィー主義とは、預言者ムハンマドが生きた初期イスラーム（サラフ）の時代を理想とし、イスラームの原点に立ち返って現状を見直すことでイスラームの復興を図る改革主義のことで、現代社会にイスラーム法を厳密に適用させようとする運動や潮流に対する呼称として使用されることが多い。

（４）イスラーム学者はクルアーンやハディース（預言者ムハンマドの言行録）、イスラーム法といったイスラームの中で外面的・表面的な知識の専門家であるのに対し、スーフィーは内面的・倫理的な指導を行うエキスパートという側面が強い。

（５）もちろん欲にまみれているスーフィーがいないわけではない。

学び、そこで教師をする傍らで連邦シャリーア法廷の判事を務め、ハク政権下のイスラーム化政策に携わった。今年（2020 年）4 月のパキスタン全土ロックダウンに際して、宗教政党をはじめとするウラマーの代表者が集まった会議が行われたが、彼はその筆頭として会見を行った[(6)]。またイスラーム経済に関しても深い造形があり、その著作はウルドゥー語だけでなく英語やアラビア語でも書かれており、中東や東南アジアでも広く読まれている。全世界のムスリムで影響力のある人物を毎年 500 人選出している The 500 Most Influential Muslims の 2020 年版で、彼は栄えある第 1 位に選ばれており、全世界的にその名が知られることとなった。

以上の派閥を理解することで、イスラーム学者の主張やバックグラウンドをある程度類推することが可能である。ただし同じ派閥でも対立は起きており、派閥に属する全ての学者が同一の見解を有しているわけではないことに注意しておきたい。その最たる事例がパキスタン独立をめぐるデーオバンド派ウラマー内の対立で、パキスタン独立に否定的なインド・ウラマー協会（Jamait Ulama-e-Hind）から、独立を支持する学者たちが離れて、イスラーム・ウラマー協会（Jamiat Ulama-e-Islam）を結成した。そのため前者はインド、後者はパキスタンで活動を展開している。

今回はスンナ派の派閥について取り上げたが、パキスタン国内にはシーア派も少なからず存在し、南アジアにいるシーア派の人口はイランに次いで多く、彼らの存在も見過ごすことはできない。彼らについては今後解説していきたい。

3．今後の連載について

以上、パキスタンにおけるスンナ派の派閥について簡単に概観した。それぞれの派閥は宗教政党を有しており、パキスタン独立から 74 年（もしくはそれ以上）の歴史の中で分派や連合を結成してきた。これらの宗教政党を中心に次回以降詳しく取り上げていく。ただ筆者の力量的にこれら全てを短期間で一度にまとめ上げることは難しく、また似たような政党名や馴染みのない名前が数多く出てくることが予想されることから、読者の紛らわしさを回避するためにも数回にわけて連載を行うことにする。現在以下のテーマ・項目を予定している。

○南アジアにおけるイスラーム宗教政党前史（19 世紀のスンナ派内部の対立について）
○パキスタンを中心としたイスラーム宗教政党史
（1） デーオバンド派
・インド・ウラマー協会（Jamait Ulama-e-Hind）
・イスラーム・ウラマー協会（Jamiat Ulama-e-Islam）

（6）“Prominent ulema say lockdown not applicable to mosques, congregational prayers to begin,” Dawn. 15 April 2020. (https://www.dawn.com/news/1549171/prominent-ulema-say-lockdown-not-applicable-to-mosques-congregational-prayers-to-begin) 2020 年 9 月 29 日閲覧

（2） バレールヴィー派

・パキスタン・ウラマー協会（Jamiat Ulama-e-Pakistan）

・ラッバイク運動 (Tehreek-e-Labbaik)

（3） アフレ・ハディース派

・アフレ・ハディース協会（Jamiat Ahl-e-Hadith）

（4） ジャマーテー・イスラーミー

（5） シーア派

取り上げる順序に関しては前後する可能性があることを先にお断りしておきたい。インド・ウラマー協会はパキスタンで活動を行っていないものの、南アジアで影響力を持った最初のイスラーム宗教政党として重要なため立項している。また本連載ではイスラーム宗教政党に焦点をあてるため、過激な武装組織については取り上げないが、パキスタン運動に身を投じたウラマーやムハンマド・タキー・ウスマーニーのように政府やシャリーア法廷に大きな影響力を有する現代パキスタンのイスラーム学者ついては、なるべく解説していきたいと考えている。

次回は「南アジアにおけるイスラーム宗教政党前史」ということで、19 世紀におけるスンナ派内部の派閥形成について取り上げる。特にデーオバンド派やバレールヴィー派、アフレ・ハディース派がどのように形成されていったのかについて紹介する。

（付記）本連載に関連した宗教団体やイスラーム学者、マドラサについてさらに詳しく知りたいといったご要望がございましたら日本・パキスタン協会事務局〈kyokai@japan-pakistan.org〉までご連絡ください。ご要望に関しましてはできる限りお答えし、本会報に公開していく予定です。

（まつだ　かずのり・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 特任研究員）

参考文献

・井上あえか，牧野百恵．2019「2018 年のパキスタン：新政権の発足で民主化の進展なるか」『アジア動向年報』pp. 565-590.

・加賀谷寛．1992「政治エリートとしての宗教勢力」山中一郎編『パキスタンにおける政治と権力：統治エリートについての考察』アジア経済研究所．pp. 255-293.

・中野勝一．2014『パキスタン政治史：民主国家への苦難の道』明石書店.

・深町宏樹，小田尚也，牧野百恵．2003「疑似民主体制の樹立：2002 年のパキスタン」『アジア動向年報』pp. 563-590.

・萬宮健策．2010「パキスタンにおける政党の現状」山根聡編『南アジア・イスラームの多角的解明にむけて：歴史・思想・文学・政治』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属イスラーム地域研究センター (KIAS) pp. 98-121.

・山根聡．2000「パキスタン軍部と宗教勢力：対アフガニスタン政策を通して」内川秀二編『パキスタン—

軍事クーデターの背景』アジア経済研究所．pp. 75-83.

- Akbar, Muqarrab. 2020. “Religious Political Parties in Pakistan,” Jeffrey Haynes (ed.), The Routledge Handbook to Religion and Political Parties. Abingdon, Oxon: Routledge, pp.169-180.
- Haqqani, Husain. 2005. Pakistan: Between Mosque and Military. Washington, D.C.: Carnegie Endowment for International Peace.
- Ingram, Brannon D. 2018. Revival from Below: The Deoband Movement and Global Islam. Oakland, California: University of California Press.
- Zaman, Muhammad Qasim. 2018. Islam in Pakistan: A History. Princeton, N.J.: Princeton University Press.